
勇者行く

紫苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者行く

【Nコード】

N0392DT

【作者名】

紫苑

【あらすじ】

誰が呼んだかこんな勇者・・・
部屋でゴロゴロしていたらいきなり眼前異世界。
しかも「勇者」として呼ばれたらしく期待と羨望を向けられる。

だけど、僕はそんな人間じゃない、弱い人間だ。

でも、弱くても、僕は勇者なんだな。

「たとえ何があっても前に進んでいかなくてもはいけない、それが勇者だ」

その言葉を胸に刻み、何があろうと進んでいく。

たとえその先が奈落でも、絶望でもね。

1話 始まりは、唐突に

みーんみんなみんな、昼前だというのに家の外からやかましいセミの鳴き声が聞こえる。

後ろのベランダにはキンカンの木が植えられていてそれに何匹か止まっているのだろう。しかし耳にキーンと響く音だというのに、本当にメスは寄ってくるのだろうか？寄ってきたメスはその鳴き声のどこに惹かれたのだろうか？

なんてことを疑問に思いつつ耳を防ぎたくなる音を尻目につけっぱなしのテレビを見る。

テレビにはバラエティ番組が映っていて司会には中堅芸人、ひな壇には人気の芸人や今注目の若手俳優などが座っていた。それを机に突っ伏して流して見ていたがセミの鳴き声があまりにも煩かったので手に持っていたリモコンで音量を上げる。

ちょうど40くらいでセミの声がだんだんとフェードアウトしつつ人気芸人の声がフェードインしてきた。音量を上げている時はひな壇の人気芸人を弄っていたようだが上げ終わった時にはそれが終わり司会が次の項目に移っていた。番組内にはパネルがありそれには今日番組がする内容がおおまかに書かれていた。どうやら次は今話題のサッカーの天才青年特集をやるようだ。机に突っ伏して鈍った体を思いっきり伸ばして目を擦り視界をクリアにする。そして机に乱雑に置いていた包装紙を破り煎餅を食べる。この青年が通っている高校が近くにあつてこちら辺の人は少し広い道路の方へ行けば何度か見かけるらしい。地元ではヒーロー扱いだ。しかし世間の話題には疎い僕だったのでこの青年のことは知らない。だって僕はその高校と反対の高校だからそもそも合わない。しかし知らないものを知らないままにしておくのも難儀なのでこの機会に知っておくか。画面に映る青年のパネルを凝視した。

サッカーの天才青年は今年で僕と同じ歳の18歳でプロ大注目の高校生。サッカーで有名な強豪校で一年の時からレギュラーとして活躍。2年の時には全国大会で得点を量産したり、足技で3人抜いたりと大車輪の活躍でチームの優勝に貢献、その実力を世に知らしめた。今年は最後の大会。チームの絶対的エースとして、チームを支えるキャプテンとしてチームを二連覇へと導くことを期待されてる。実力もさることながらルックスも爽やか系の好青年を思わせる顔立ちで女性ファンも多くアイドルに負けない勢いで好感度は高く、尚且つ成績も学年で上位とまさしく三拍子揃ったスター、とテレビが紹介した。

サッカー青年特集に入る前に番組がCMには入ったので重い腰を上げながら立ち上がる。体が抜けた分の水分を補給するために冷蔵庫の麦茶を欲した。暑い．．汗で濡れているTシャツをぱたぱたと揺らして少しでも温度を下げようとする。汗のおかげで少し涼しかったが結局その場しのぎでしかなかった。そんな暑さの中部屋の隅で呑気に眠るクーラーを睨みつける。くそ、クーラーが壊れているとここまで不便だとは、現代文明の機器のありがたみを、失くしてから痛感した。クーラーは昨日突如電源がつかなくなった、夕方まではついていたのだが夕食を食べる時にはリモコンのスイッチを押しても反応しなかった。近くの電化製品屋は今日が定休日なので今日1日の我慢だがどうもそろそろ限界を迎えそう。

扇風機だけで我慢できるかこんな暑さ。悪態をついても涼しくなるわけがなく、おさまらない暑さが一層イライラさせた。居間を出て台所へ向かう、台所は人2人が同時に入れば窮屈に感じるほどの広さで物があまり片付けられていないのですこしごちゃっとしていてように感じる。母は片付けないところに来て恒例的に呟くのだがそれが一向に実現されない。仕事で忙しいので仕方ないことでもある。

古い台所の真ん中にどんとこの台所を仕切る大御所のように鎮座する冷蔵庫の前に来る。実際僕の一個下の17歳、よう弟。そんな弟の身体中にはシールをはがした後のような白い点々が所々に残っている。兄である俺がベタベタと訳のわからないシールを全身に貼り付けたのだ。そんな白い点々は角ばったもので剥がそうと躍起になっていた親の苦勞が滲み出ていた。そんな思い出の冷蔵庫の戸を開けて中を見る。中には昼飯のチャーハンや夕飯の残りのシーフードサラダが顔をみせる。このシーフードサラダあんまりおいしくなかったな・・・思い出してやや苦笑いしつつ目的の麦茶の入った容器を手に取り台所に置き、冷蔵庫の横にある食器入れから大きめのコップを取り出し麦茶の横に置く。麦茶は朝に冷やし始めたのか思ってたよりも冷えていなかったたので冷凍室から氷を乱雑に2、3個掴むとそれをコップに入れた。からんからんと綺麗な音を鳴らしながらコップの中で重なり合いクルクルと一回転する様子は仲よさそうに鬼ごっこする氷兄弟のようだった。この年頃にもなつてメルヘンチックに考える脳みそを自嘲しつつ可愛い兄弟めがけて無慈悲に麦茶を注ぐ。コップの表面は結露して氷もミシツと小さな声をあげて浮いてきた。小さな声に少しばかりの背徳感を覚え、コップを手に持つ。程よい冷たさだったのでそれを頬に当ててそのままテレビのある居間に向かう。ミシツ・・・ミシツ・・・耳には先ほどよりもクリアに兄弟の悲鳴が聞こえる。ごめん。心の中で何度か謝罪した。だんだんと兄弟は溶けていき、手にも伝わる良い冷たさになったお茶を一気に腹に納めつつ居間に入る。相変わらずムシムシとした暑さの中テレビは映像と音声を垂れ流していた。先ほどとは違いテレビの音が大きく聞こえる。蝉が飛んで行ったのかとベランダに目を向けつつ古臭い机にコップを置く。クーラーは相変わらずニートしているので仕方なくテレビの横で首を左右にゆっくり振り回している扇風機の首根っこを片手で掴んで持ち上げる。モーターが無理な持ち上げ方に抗議しているように不穏な音を鳴らし始めたが無視してそのまま先ほどまで座っていた座布団に腰を下ろしてその後ろに

置いた。扇風機は解放された瞬間首をまた左右に振り始めたが、それでは使用者が涼しくならないので後ろを向き回っている扇風機を強引に動かしてこちらに向けて固定させた。こっちにだけ風を送っておけばいいんだ、ブラッくな家を買われたことを後悔するんだな。

後ろの扇風機が己の運命を呪っているだろう中僕はテレビを見る。特集は既に小学生を終えて中学生に突入していた。お茶を入れてくれるだけの間だったので小学校に関してはそれほど取り上げることはなかったのかもしれない。僕も小学校時代なんて語ることもなんてない、楽しい遠足や修学旅行なんかがかろうじて思い出せるだけだ。こんなどうでも良いことで少し自分に親近感が湧いてきた。机に肘を乗せてやや前のめりになって画面を見つめた。番組では中学生となった青年がサッカー部でエースとなるまでの過程がドラマで再現されていた。

一年の時はベンチ外、同じ一年の中でも飛び切り頭が抜けていたようではなかったらしい。まあ覚醒の時はまだ早いか、2年になってやっとメンバー入りを果たしたがそれでも公式戦は後半の5分のみ出場。特に結果も残せぬままチームも敗退、一回戦負け。ここまで見ていて思ったが僕のイメージと違って決してシンデレラボーイというわけでもないのか。あるはずもないお茶を飲むようにコップを持ち上げて口に近づける。

3年生、彼は一回戦負けの悔しさから一心不乱に努力した。人の3倍走り込んで、人の3倍ボールを蹴って、人の3倍ボールを追いかけて、人の3倍声を出して

「3倍やっても不安だった」と青年は当時のことを振り返る。努力を神は認めたのか、急成長して大会前の練習試合で大活躍、大会ではエースとして出場してチームをベスト4に導く。しかしあまりの急成長に声はあまりかからずその中から選んだのがそこそこ強かった今の高校らしい。高校入学前から今でも3倍練習を忘れず心がけていて、後輩もその姿を見習っているらしい。

「彼はただ才能だけでなく人の3倍もの努力で天才と呼ばれるようになった。まさしく努力の天才である」
なんてテレビ的に上手いこと言っちゃった、て感じでドラマを締めた。

次のコーナーに移ったのかひな壇の芸人が立ち上がりステージの真ん中までくると何かギャグをやり始めた。特に面白くもなかったのでそばに置いていたりモコンで電源を落とす。しんと静まりかえる居間。セミはいつの間にかいなくなり扇風機の小さなモーター音だけが後ろから聞こえる。テレビをみすぎたせいかもしれないがぼーっとしてまぶたも重い。眠たいだけの間違いかもしれないが。座っていた座布団を左にずらしてそれを枕に寝転がる。こう静かだと眠気が襲ってくる。寝返り扇風機の方を向く。扇風機は誰もいないのに虚しく風を送り続けていた。かわいそうだったのでスイッチを押して止めてやる。少しの休みだ、すっかり体を休めるよ。扇風機が止まり辺りは完全に静寂に包まれ、自分の呼吸音しか聞こえない空間。息を止めれば無音の世界だ。

努力、人の模範的人物、期待、ねえ、先ほどの言葉を繰り返すうわ言のようにつぶやく。そこでふと思う。

何かに本気で取り組んで、挫折して、それでも必死に壁にぶつかってぶち破った思い出。そんな類のものが人生でなかった。壁は横をすり抜け、苦勞からは避けて。挫折すれば諦めて。どこかで終わってしまっている。人の模範的人物なんて全く無縁だ。期待？人の前に立ったことのない僕にそんなもの誰からもあるわけがなかった。あれ？自分はなんだ？自分は何してるんだ？

あの青年が夢に向かって汗を流している今、僕はこうしてゴロゴロただ毎日を消費している。何かをしようにも何をすればいいのかわからない。何かしなくてはと焦る自分がただオロオロとしているだけだった。そうして毎日が過ぎていく。何もできなかった、その後悔して次の日を迎え、またオロオロする。

それを繰り返して、繰り返して。学んでいるはずなのに行動できない。結局思っているだけなのだ。馬鹿な自分だから。

頭を抱えて鬱ぎ込むようにして体を丸める。

自分はなんだ？自分の存在価値はなんだ？

底なし沼に足を踏み入れてしまったようで、ずぶずぶと自分の存在価値が沈んでいく。思春期特有のマイナス思考がそうさせているんだと思うけど、もうこうなれば止まらない。

体を縮めてより一層丸くなる、もう猫みたいだ。

これから先どうなるんだ？大学に行って、就職して、この社会の一員として生きていくのか？普通の生き方をして・・・

中学の時、普通は嫌だと思った。だから何か有名になりたかった、なんでもいいから。けど自分にそんなスター性はないことも知っていた。歌だつて上手くないし、文字を綴ることも上手くないし、人を笑わせることも得意じゃないし、アクションに敏感でもないし、顔もカッコいいわけじゃない。何もなくて、あるはずない。

そんな自分が嫌だ、何か別のものになりたい。

自己嫌悪と周りとの劣等感が僕を押しつぶす。逃げたくても逃げられない辛さとどうにもすることができない無力さ。もう何も考えたくなかった。

丸まったまま目を閉じてる。するとすぐにすうー、と意識は闇に意識を引きずり込まれていく。しばらくすると静かな部屋には小さな寝息だけが音する。

こうやってまた何もしない、結局同じだ。

けど人はきつかけさえあれば変わる。

僕はそれが特殊すぎたのだ。

闇に沈む意識が、次に浮かび上がる時が僕のきつかけになった。

ぼんやり歪んだ視界を擦って、クリアにする。真っ先に天井が見えたが天井がいつもより遠く感じる。体勢もいつの間にか仰向けになっ
ていて背にはふさふさの物。それを手で掴んで顔の前まで持つてくる。さらさらして
いて細いものが何本もある。何本かに絞ってよく見てみるとこれは．．．干し草？

素早く起き上がって先ほどまで寝ていた方に振り向く。膝あたりまで積まれた干し草には大の字になっていた僕の形が残っていた。そこから少し視点を上に向けると木の壁。そして左に向けると、ぶると一声鳴いて尻尾を軽く横に振る茶色の動物。

「うま．．．?」

半袖半ズボン裸足の男の目の前には、馬がいた。

2話 勇ましい者の目醒め(前書き)

遅くなりました

2話 勇ましい者の目醒め

「え．．．馬？」

木の柱にくくりつけられていても怖い側面からこれほどまで近くで見たのは初めてなので少し近寄ってみる。馬はひひんと嘶く。少し驚いたがこちらに目もくれなかったのもう二、三步寄る。素人だが毛並みは良く手入れされているのがわかるほど整っていた。

手を伸ばせば届く距離、馬目馬科に属する茶色の馬が僕の目の前にいた。

馬の顔の方には僕の腰ほどの柵があつてその向こうには通路のようなスペース、そしてその先には馬はいないが今いる場所と似た空間馬がいて、この状況。間違いない、ここは

「馬小屋だ」

僕はここが馬小屋だということは理解出来た、ただ何故馬小屋にいるのか？ということは考えようとしなかった。何故なら既にわかつていたからだ。

「夢か．．．」

明晰夢という言葉がある。これは夢を見ているとわかる夢のことだ。まさしく今がこの状況なのだ。そうなのだ、これは夢だ、とそう思つて．．．いたかつた。

先ほどから臭う獣臭がその現実を少しずつ否定していく。その臭いに思わず鼻をつまみたくなる。

．．．さて、どうするか

あまりウロウロするのも得策ではないと思うがここにじっとするのもあまり良くないのかもしれない。迷つたが決断の末とりあえずここを出ることにした。善は急げ、柵の方に近づく。

柵は難しく作られているわけではないが縄などですっかりと作りこまれている。馬の前の柵部分は開閉するかもしれないが馬に容易に

近づくのは危険だ。馬の中には気性が荒いやつがいて足で人間を蹴る性格のもいるらしい、競馬でも危ないので絶対馬の後ろには立たないらしい。先ほどからここにいて横の馬は大人しいかっかかり調教されているのか人には慣れていないらしい、が怖い。馬は柵に近づいた僕を目でちらりと見るがそれ以上近づかないことを確認するとぶるぶると小さく嘶き尾をパタパタと降り始めた。馬の方は大丈夫そうだが、それを確認するともう一度目の前の柵を見る。腰ほどの高さなので乗り越える事は可能だ。柵の一番上に手をつけると、ちよつとネチヨつとしてる。思わず顔を歪める。何が原因でこれほどネチヨつとするのだろう。考えたくもない。両手を乗せると次に柵の一番下の横棒に足を乗せる。つま先がなんとか乗ったが粘り気が足裏でぬめりへと変わり、少し滑るがなんとか両手両足を乗せることは出来た。さあ両手両足を反対側に移すぞ、そう思つて足を上げた時

「．．．誰、ですか」

声が出た、声の方向の左を向くとショートの金髪で優しそうな顔立ちの青年、年は僕と同じくらいだろう、と思われるが身長は僕より数センチ低いので確信は持てない。手にはバケツを持っていて何かお仕事をしに来たようだがそのきている服とミスマッチしている。貴族が着そうなその黄色のヒラヒラがついた服を着ていてとても下働きの人間には見えなかった。

「えつと、あの」

柵に乗る１８歳と貴族のような青年。目が合つて気まずくなる、だけどそらせない。そらしてしまえば悪いことをしたと思われる。馬小屋に行く謎の男が柵を乗り越えようとした、なんて通報物だ。僕なら迷わず通報する。けどそれは侵入してきた、から通報するのであつて僕は気づいたらここにいたのだ。通報されても僕に言えることは知らない、と気づいたらここにいた、だけだ。

「えつと、とりあえず降りませんか？」

それはありがたい、ぬめりと格闘していた足腰が悲鳴を上げ始めて

いた。足腰ガタガタでまるで子馬のようだ、馬小屋で子馬のように。
．．．うまくないか。

青年の提案に無言で頷き柵を乗り越えた。

ぬめぬめの手のひらをズボンで拭う。それでも上手く拭き取れなかったので服の側面でも拭う。しかし本当になんなんだこれ？馬小屋つて又メ又メするの？

「その馬は棒をよく舐めるから、だよ」

唐突の青年の言葉に驚き、思わず数歩後ずさる。後ずさった僕を見て何故後ずさったのか理解できてないようだ。その様子からどうやら僕について警戒心やらを持つていないので今すぐ通報されることもなさそうだ。なぜ夢で通報だの考えないといけないのかわからないが夢の中でも悪い気分でいたくないから、というのが理由で1番しっくりきている。主に目覚めの意味で。

「舐める？」

警戒されていないならフレンドリーにいいこう。逆にオドオドしていても警戒されるかもしれない。後ずさった分ゆっくり近づいていく。

「そう、その子の悪い癖で柵を舐めちゃうんだよ。美味しくないと思うけどね、なんでだろうね？」

となると手の又メ又メは馬の唾液。しかもこの水々しさ、舐めただてホヤホヤのやつかもしれない。そしてそれを服で拭き取ってしまった。

「マジか．．．」

「大丈夫だよ、害はないよ」

安心させようと笑顔を会話に付け加えてきた。うおお、眩しい、可愛い。金髪も相まってひまわりのようだ、いや蒲公英か。

「ところで、あなたは誰？」

核心部に鋭くメスならぬバタフライナイフを刺してきた。和やかな雰囲気の中今聞くかそれを。少しの冷や汗を感じる。

「えっと、まあ信じてもらえなさそうだけどいいかな？」

「大丈夫、とりあえず話してほしい」

何が大丈夫なんだろう？そして信じるかは別か。

中身は意外としっかりしているのかもしれない。とりあえずここまでのことを話すことにした。話すと言っても目覚めたらここにいるじつとしていても仕方ないので動こうと柵に手をかけたら君とバツタリ会った。これで終わる。しかし話をしている時、正確にはここで目覚めたという言葉で一気に顔の表情が変わった。驚きから、何かを考えているような険しい表情のまま少し俯向く、その表情で僕の話を開始聞いていて、話し終わると静かな空間となった。先ほどの明るい雰囲気から一転だったので少し戸惑った。まさか信じてくれないのではないだろうか、いやそもそも信じ難い話だから不意に何秒か考え込んでいた青年は口を開けて話し始めた。

「ここで目覚めた・・・今の時期、なるほど」

「信じてくれないよね」

「いや、信じるよ」

信じてくれるんだ。目の前の青年の心の広さに感謝しつつも疑問に思う。なぜあつさりとしたのだだろうか？これは僕の夢だからサクサク進むようになっていて、なんて説明がつくのかもしい、それはそれで簡単だ。

「どうして、こうもあつさり信じてくれるの？」

青年の金色の目はまっすぐに、質問した僕をとらえていた。宝石のように綺麗な目は、僕の全てを見透かしているようだった。綺麗だけど、恐ろしい。その美しさに心奪われると同時に、青年に少し恐怖した。底知れぬものが、感じられたからだ。

「信じるしかないんですよ」

そう言いながら綺麗な直立になる。突如の改まった態度、そして敬語。戸惑いつつも口に出さない。青年の言葉を待つ。急な改まった態度、それが何を意味するのか、どんな言葉だろうと受け止めるつもりだ。

「私たちはあなたを待っていました。願って、願って、そうしてこたえてくれたのですね、勇者様」

それは、僕の予想はるか斜めをいく、言葉だった。
僕が、勇者？

2話 勇ましい者の目醒め（後書き）

馬に乗ったことあります（どろどろでもない）

3話 馬で駆ける(前書き)

キツカケが欲しいです

3話 馬で駆ける

「ゆう．．．しゃ？」

勇ましい者で勇者？

混乱する頭の中なんとか漢字だけは理解する。だけど理解できたのはそれだけ。

「そうです！あなたは勇者様です！」

蔓延の笑み、屈託のない無邪気な顔。とても目の保養になる。しかし目が潤っても見ようとしているものが見えない。

「．．．ごめん、とりあえず話が掴めないから」

このままこうしていてもわからないので話を進める。先の見えないことになつてきそうだから。

「あ、すいません．．．」

青年はそう言つて深々と頭をさげる。流石にそこまでは求めてないので頭を上げるよう促す。そうする時間があるなら早く説明してほしいと思つのは悪いことだろうか？

「そうだ！早く王に報告せねばいけませんね」

促されすぐに頭を上げた青年は上げたと同時に早口で自分に言い聞かせるようそう言った。

この人は根本的に人の話を聞かないのだろうか？今の現状を考えることに手一杯になつて周りが見えなくなるタイプだろうか。あせあせと動く青年をみる。この様子じゃとても落ち着いた説明を求められる状況じゃない。なら今王のところへ行つてすべてわかるならその方が良くもしいない。

青年は綺麗な金髪が縦横によく揺れるほど慌てている。しっかりとる、と思つていたがまだ若いな、なんておっさんくさいことを思う。さて、どこまで見れるかわからない夢、明晰夢なんて経験は稀なんだから楽しむか。青年の慌て様からこのままでは埒が明かない

ので腹を決めることにした。

「僕もまだわからないけど、取り敢えず王のところへ行く、でいいのかな？」

ノンストップで動き続けていた動きが急に止まりこちらを見る。止まったり動いたり忙しい人だな。

「来て早々なのですが、構いませんか？」

「別に気づいたらここにいただけだし、疲れてないよ。それにしっかりとした場所ですっかり話を聞かないとね」

先ほどから夢だ夢だと言ってはいるがなんだがこれが夢であることを忘れかけている自分がいる。この馬小屋の匂いとあの干し草の感触。手についた馬の唾液、目の前の青年のはつきりとした感情、息遣い、筋肉の動き。

全てがダイレクトに僕の五感に伝わってくる。それが脳へと伝わってどれにおいても疑い様のないリアルさがある。もしかして夢じゃない、今更ながら夢でないこと、それが正解であることを脳が感じ始めたが心がそれを否定する。そんなことがあるわけない。

「そうですか！なら早速向かいましょう」

多分尻尾があつたらはち切れんばかりに振っているほど、嬉しそうに返事をしてくれた。声に色があれば絶対黄色だ。青年はそのまま先ほどまで僕のいた馬部屋の前まで来ると馬の前の柵を外す。スライド式で横にずらすことで馬を出したりできるようだ。柵は開いたが馬は出ることなく留まりしつかりと待っている。なるほど、しっかりと調教されているな、なんて素人目からでもわかる。馬は青年に連れられていく、無言で馬を引っ張っていくものだから、僕は慌てて同じスピードを保って後ろからついていく。馬小屋の扉がどんどんと近くなっていく。この先に一体なにが広がっているのだろうか、心臓が高鳴る。抑えられない好奇心が僕の足を急かすがそれをなんとか我慢して一定のペースを保つ。

夢なのにとてもドキドキする、なんでだろう？考えてみて一つの答えが浮かんだ。

きつと久しぶりにいい夢を見られたからかもしれない。最近は何か銃を持った男に追いかけて回された夢くらいしか見ていない。いきなり勇者様と言われ慕われたんだ、悪い気はしない。

扉の前まで到着する。馬が通れるように作られた木の大きな扉だ、この世界では勇者なのだ。全力で楽しもうじゃないか。

青年が扉を開け始めると、年季の入った鈍い音が馬小屋に響きわたる、そして音とともに光が差し込んでくる。人工の光ではなく、生きた太陽の光。真っ直ぐと僕の顔に突き刺さる、あまりの眩しさに顔を背けた。

「すいません勇者様、眩しかったですか？」

馬小屋に響いていた音が止み声が聞こえた。

顔を上げるとピントのずれた眼がだんだんと光に慣れていくと同時に、景色が鮮明になっていった。

まず見えたのが青年の顔、太陽の光に照らされた金髪は、より一層輝いていた。その先に見えるのが快晴の雲一つない空が広がっていた。小さな子供が書いたように、単色で、力強い青だった。そんな青い空に迫らんばかりの高さの建物、城が青年の後ろからはえていた。白を基調とした城は堂々と聳え立ち美しさと同時に風格を覚えた。

「さあ、城に向かいましょう。」

青年はそう言いながら慣れた手つきで馬にまたがり、体を半身にしてこちらに手を差し伸べる。

馬の横に取り付けられた足をかける紐に足をかけて、か。馬の側面に移動する。先ほどよりもはつきりとわかる毛並みの美しさに少々感動しつつ、青年から差し伸べられた手を握る。顔に似合わずとても力強い手だった。足をかけると目で合図する、それを見て青年が手をゆっくりと引っ張る。

華奢だと思っていたがどうやらそうでもないらしい。僕を引っ張る顔はとても涼しそうで余裕綽々といった様子、馬にも慣れていることから武術に精通しているのではないか、という仮説を立てる。多

分正解だと思っけど。

青年の手を借りてなんとか馬にまたがる。しっかりと馬に乗れているのを確認されたので返事をする。

「しっかりとまっていて下さいね」

落馬したら大怪我するらしい、ので青年の脇腹をがっちり掴んで頭を少し下げる。

遊園地のジェットコースターなんて目じゃない。けど安全バーもないアトラクションなんて怖い。

「すみません．．．ふふ、そこ、弱いのです」

体を小刻みに震わせ、小さく笑う青年。何かこちらとの温度差を感じてしまう。こちらは今から死ぬかもしれない、みたいな決死の覚悟でいたのに。しかしどれほど弱いのか、試しに手で肉を揉むように優しく触れると青年は蛇みたいに体を左右に振る。

「やめて．．．ください、ふふふ」

くねくねと動く姿はとても面白かったが、ここは馬上。あまりふざけていると落ちてしまったり何かの拍子に馬を動かしてしまうかもしれないのでほどほどにしておく。脇腹から肩に手を移す。

「もう、勇者様！」

こちらを向かず文句を言うてくるが、その声が既にかわいい、耳の栄養剤だ。

「では、馬を動かしますね」

くる、肩をしっかりと掴んで備える。

蹄が地に着く音がする。軽快でいるがしっかりと踏んでいることが確かにわかる、それと同時に体が少々縦に揺れる。地を蹴る間隔が短くなるにつれて、体を感じる風が強くなっていく。短い髪が持つて行かれ、顔に風がダイレクトに突き刺さる。半袖短パンなので突き刺さる風が冷たく感じられ、思わず目を瞑り顔を伏せる。

馬上に人2人、そんな状況からはイケメン王子と可愛い城の姫が想像される。残念ながらそんなことはなくイケメンのような可愛い子とそれに情けなくひつつく男の図。

そんな2人が馬で向かう城は、徐々に大きくなっていく。そこで何がわかるのか。
僕にはただ受け入れるしかなかった。

3話 馬で駆ける(後書き)

毎日朝にダッシュします(適当)

4話 振るう剣、流れる血（前書き）

おそくなりました

4話 振るう剣、流れる血

目の前には空に迫らんばかりの炎が風に煽られて大きく体を揺らす。揺らせば揺らすほど、火の粉を撒き散らす。その姿は怒り狂う鬼の姿のようだった。

そこから視点を下ろすと絵画などで見る西洋の石造りをベースとした見慣れない建物ばかりの街並みがそこにあつた。しかし優雅なあの風景はどこにもなく、ある建物は粉々に砕け散り、それなりに舗装された道路を塞ぐように残骸が転がっている、あるいは建物自体の形は保っているものの、天井が炎で包まれていたり、塗料をぶちまけたように、壁が所々赤くなっている建物もあつた。街が街でなかつた。そして何か肉が焦げるような嫌な匂いを漂ってきている。空も黒煙に覆われて太陽すらどこにあるのかわからない。建物から出ている炎がそんな闇中の変わり果てた街を照らす。

そこに立っている自分、手には皮の薄い手袋、服は藍色の布で出来た動きやすいロングシャツとジーパンのような白の厚手のズボン、腰には太いベルトが巻かれていてそれに挟まれて短めの剣があつた。装飾などは一切なく柄から曇り一つない輝きを暗い中煌めかせる。なんだこれは？

目の前の光景と自分の姿が一体なんなのか、理解できなかつた。

「僕は馬に乗って、それで・・・。」

目覚めてからの経緯を思い出そうと記憶の筆笥を引き出す。馬に乗った僕は城に無事着いたはいいが下ばかり見ている前を向いていないものだから酔ってしまつて、それで・・・、だめだ話が繋がらない。頭を抱えてもう一度整理しようとしたその時、突如悲鳴が聞こえた。甲高い女性の悲鳴。声色からかなり折半詰まっていることが理解できる。

声の方に顔を向けると数メートル先に若い女性が剣を持った兵士に

追いかけられ視界を横切ろうとしていた。美しい白色の髪は乱れ、女性の橙色の服は煤で汚れていて靴も片方しか履いていない、足からも出血して痛々しく走っていた。対する兵士は全身鎖帷子の鎧に身を包みフラフラと酔っ払いのように危なげな足取りで女性を追っていた。

助けないと、今から女性があゝの兵士に何をされるかなんて大体想像がつく。

女性と兵士を追って走り出す。幸いにも両方それほど早くなく、高校生の平均的50mタイムである僕でなんとか兵士が女性に追いつくまでに追いつくことが出来そう。その背中はぐんぐんと近づいていく、が、近づいていくにつれ腐乱臭が強くなっていく。兵士の肩に手がとどく範囲まで近づくと、胃の中の物が戻ってきてしまい、そうなる不愉快さを人に与えるまで匂う。

曲がり角を曲がると女性が止まっていた、目の前には建物の残骸が道を防いでいたからだ。かなり大きい建物が崩れたのか4・5mほどの高さはありそう。

女性は残骸の山を何度か登ろうと手をかけるが、途中で落ちてしまふ。ジリジリと迫る兵士。とうとう残骸の前でへたり込み、肩で息をしながら足を曲げて手で脛のあたりを押さえていた。足の方が限界でもあつたらしい。兵士は人の声帯から発せられるとは思えないほどの低音で何かを呟きながら少しずつ近づいていく。

「その人！なんで女性を追いかけますか！やめてください」近づいていく兵士の背中に思いつき怒鳴った。兵士は一瞬声に反応して止まったが、また足を進めた。

聞く耳はないらしい、なら。

兵士を抜いて女性の前に立ちふさがると、これで嫌でも話を聞いてもらえると考えたからだ。

目の前の兵士は止まる、街を焼く炎に照らされて正面からはっきりと全身が見えた。ゾンビ、が1番しっくりとくる表現だと思う、左目にはぼっかりと穴が空いていて、辛うじて右目は瞳孔に収まって

いるものの、茶色の光彩に光はなく海に沈んでいるように下一点を見つめていた。顔の肉も黄緑に変色し、唇の色も黒かった。

「なに．．これ」

人の形をした化け物がそこにいた。

見てはいけないもの、恐怖そのものがそこにあった。

足が震える、前にも後ろにも動くことができなくなった。心臓が酸素を欲しがり息が荒くなる、心拍数がどんどん上がる。

がちゃ、がちゃ

鎖帷子の鎧を鳴らして、化け物は一歩ずつこちらに歩き出す。乱れる体を鎮めようと深く息を吸ってから、鞘に収められた剣の柄に手をかける。戦うことなんてできないけど、なんとか追い払えはできるはずだ。ジリジリと迫る化け物は剣を持つ手をだんだんと高くあげると、刀身を赤く染めた剣が鈍く光る。

何人が既に斬りつけたのか、この化け物は．．．嫌でも目につく鮮血の赤。きつと、機械のように無慈悲に残虐に血を降らしていたんだ。僕も同じように斬られるのか？ 斬られたらどれほど痛いことか想像もできない底知れぬ「痛み」が僕を少しづつ後ろにも下からせた。焦りと恐怖から呼吸がどんどんと乱れる、もう深呼吸なんてしられない。

そのまま一定の間合いを取り続け向き合ったまま下がり続けていたが背中のゴツゴツとした硬いものにそれ以上の後退を阻まれた。残骸だ、もう逃げ場はない。

右の女性は先ほどから変わらず俯いて足を押さえている。手からは血が溢れて地面に小さな水溜りを作っていた、既に危機的状況を迎えていたのは明白だった。このまま血が出続けていても出血多量、血が止まっても適切な処置しなければ衰弱していつてしまう。焦燥感に駆られながらも考える。女性を見捨てて逃げ出すことも可能だ、あの化け物は足はそれほど速くない、全力疾走すれば逃げられるのは先ほどで把握済みだ。だけど、この場面をどうにかすることのできる人間は僕だけなのだ。だったら、やるしかない。腹を括るしか

ない。男だったら、守るしかない。

「こいよ、ゾンビ野郎．．．！」

震えた声で挑発し、手をかけていた柄を一気に引き抜く。穢れを知らない純真な輝きはダイヤモンドのように美しい刀身、要は初めて見る僕でもわかる新品だった。長さは少々短く一の腕と手を合わせたほどの長さだろうか？短剣と言うには長すぎる、剣と言うには短い、中途半端な刃渡りだが太さはあり人差し指ほどの横幅がある。剣を握っているとなんだか妙な事に気づく。あまりにもフィットし過ぎていて、まるで最初から僕のために作られたように計算して作られたかのようにだった、柄の太さ、重さ、刀身の長さ全て合っていた。

短いと言ったがそれほど体格の大きくない僕にとってこれくらい大ききものが振るいやすいのだ。気持ちの悪いくらいのフィット感に違和感を感じつつも、剣道のように両手で剣を持って剣先を化け物に向ける。

間合いがどんどんと縮まっていく、高く上げられた剣がいつ振られるか、その前にこちらから先に仕掛けるか。

今迫られている選択肢は数あるがどれか正解を選ばなくてはいけない、もし間違えれば後悔の時間すらないのかもしれない。死んだことすらわからずに死ぬのかもしれない。もしかして正解は一つもないのかもしれない。

考えればどんどんと汗が吹き出るがそれを拭うことすら許されない緊張感。もつともあちらは「緊張」を感じているのか甚だ疑問を感じるほど足を止めることなくゆっくりと近づいて来る。

約3m内、もう既に互いに斬りつけられる間合いには入った。来るか、やや腰を落として身構える。

「おおおおお」

辛うじて聞き取れた「お」の発音、潰れた声帯でなくては出せないような低い叫びを発して剣を振り下ろしてきた。僕の脳天へ目掛けて一気に、力任せに。刀ではなく剣なので両刃、刃はどちら側にも

ついている。日本刀のように安易に攻撃を防ごうものならこちらにもダメージはくる。ましてや素人、剣の扱い方すら知らないなら．．．体を翻して振り下ろされた剣を躲し、左には回りこむ。動作が大きいのでなんとこ交わすことができた。化け物は剣の重みに振り回されて片膝をつく。

隙ができた、これなら僕でもいけるかもしれない。鎧で覆われた所には突き刺せない、なら剥き出しの首を狙うしかない。化け物は剣を持ち直してこちらを向く、今しかない。剣を首目掛けて一気に突き出す。しかし化け物とはいえ人を刺す罪悪感が躊躇させたのか浅く横を掠めるだけとなった。斬りつけた首元からどす黒い石油のような液体が鎧を伝い地に落ちてゆく。

「おおおおお！」

化け物は吠えながら、突き出した剣を慌てて引っ込めようとした僕に突進してきた。鉄の鎧との正面衝突を全身で漏らすことなく受け止めてしまう。ふわっと少し宙に浮いたと思った矢先、背中に痛みが広がる。残骸に叩きつけられたようだ、頭を強く打ってしまい意識が朦朧とする、背中に伝う液体から頭から出血したのかもしれない。肺の空気を全て持って行かれたかと思ったほどの衝撃に声がない。口の中は切ったのか鉄の味が広がる。

痛みがどんと脳に伝わり身体中に痛みが走る。残骸にもたれてはダメだ、そう思っても足が言うことを聞かない。剣も突進された時手放したようだ。突進ひとつでこの有様。本当に現代のもやしつ子だな。

「おおお．．お」

この状況でそんな皮肉がだせるのか、今から死ぬかもしれないのに、もう既に目の前に化け物がいるのに。

「処刑人」は剣を振り上げた。あの剣についている鮮血の一滴とさるのか。怖いという感情はもうわかenかった、目の前の死をあつさりを受け入れていて、なんだがよくわからないうちに死ぬことすら自分は受け入れた。何も、なんなのかもわからないまま

「おおお．．．」

一歩踏み出して振り下ろす態勢に入る、終わりだ、目を伏せて最後を待つ。死ぬ直前は走馬灯と呼ばれる今まで歩んできた人生が頭の中で駆け巡ることがあるらしいが僕にはなかった、その代わり殺されるまでの時間がとても長く感じられた。とてもとても長く、辛くなるほど

「え？」

どれほど過ぎたか、あまりに長すぎるので思わず顔を上げる。そこには地で駄々っ子のように寝転がり悶え苦しむ化け物がいた。

「おおおおお！おおおおお！」

何か救いを求めるようにあらゆる方向に手を伸ばして、足で何かを蹴るようにばたつかせて叫びながら。

「なんなんだよこれ」

突然の出来事に呆気に取られた。女性もその姿をただ見ていた。すると異変が起きた、化け物の全身から鎧の隙間を通して何か液体が出てくる。それは先ほど見たドロドロとした石油のような液体だった。それがどんとどんと水溜りを作るまで出てくると化け物は次第に水に溺れた蟻のように動かなくなっていた。

助かったのか？取り敢えず「無事」ではないが無事に生きていることは理解できた。だがやはり「無事」ではなかった。

「この力は．．．勇者様！勇者様だいじょうぶですか？」

女性の声が聞こえてきたが、意識がフェードアウトしていく。瞼も重くなり、やがてその重みに沈んだ。

知らない天井。知らない背中のモフモフ。目を開けると仰向けに横たわっていた。ああ、寝ていたのか。少し額がねっとりする、どうやら寝ている間に冷や汗が出ていたようだ、腕で乱暴に拭う。

上半身を起こすとまず見えたのがダブルサイズはありそうなベッド、それを贅沢にも1人で使っていたらしい。布団も触ると高そうな匂

いを出しながら反発してきた。部屋は豪華だ、って言えば終わりそうなほどあつさりとしていて華美だ。

ベッドからみえる白の壁には1人の男が剣を右手で掲げている大きな絵が飾られている。その下には箆笥など家具類が並べられていた。取り敢えず横からベッドを降りる。何も履いてなかったので床のサラサラなカーペットの感触が直に感じられる。

「なんだあれ？」

ベッドは入り口から対照の隅に置かれていたがそこから部屋の中央の方に不自然に長机がぼつんと置かれていた。椅子などなく何か上に置いてあるようだ。

ぼんやりとした意識の中そこに近づく。茶色の机の上にはご丁寧にきつちりと折りたたまれた青いシャツと白の少しゴワゴワしたズボンと一本の剣が横一列に並べられていた。あれ、これどこかで見たような……。思い出した、間違いない、これはあの時僕が着ていた服だ。するとさきほど体験した出来事がフラッシュバックする。血の味、痛み、腐乱臭、女性の悲鳴、化け物。ということはあれは夢か？夢だったのか？

夢にしてはあまりに現実的であった。五感のすべてが夢だったことを否定する。しかし寝ていたのは事実。だからこれは夢だ。そうゆうことにしておく。

「今はこれを調べるしかないな」

目の前に並べられた物をじっくり見てみる。シャツやズボンは綺麗な新品だったが剣だけは違い夢の中で見た時よりも薄汚れていた。柄はあの時ほどの輝きはなく所々の色は変色していた。抜いて刀身も見てみようと思ったが何故か抜けなかった、鏢から伸びている紐が鞘に括り付けられている、どうやら縛っているらしい。仕方ないので鞘の方に目を移す、鞘はじっくり見ていなかったので見てみることにした。焦げ茶色の鞘はかなり汚れていて少々臭う。手で少し鞘を払うと元の色が見えた。どうやらもつと明るい色だったらしい。裏返すと何か黒い見慣れた文字が縦書きされていた。手でそこをこ

するとはつきりと見えてくる。

そこには「勇者の剣」と書かれていた

．．．ださい、なんだこれ

あの時輝く剣は、もうどこにもなかった

5話 小さな僕でも（前書き）

優しそつとよく言わねます

5話 こんな僕でも

滑らかな曲線を描く箒笥の取っ手を引つ張り中のものをみる。引つ張った時、あまりにも軽かったのでもしやと思っていたがやはり中はすっからかん。

がっかりで肩を落とす。なんだここ何もないじゃないか。これだけ箒笥や引き出しがあるなら何か入っていると思っただが、これは期待はずれだ。何もない引き出しを元に戻す。かれこれどれくらい経過しただろうか？僅かながら空腹を感じ、馬小屋で目覚めてからかなりの時間がたったことを腹時計でそれなりに認識していた。

目覚めて剣の文字を見て以降は特に何もしていない。部屋を不用意に出歩くのも如何と思いいこの部屋で待つことにした。絵の横にある大きな窓ガラスから景色が見えると思いい近寄ってみたが透明ではなく加工されぼんやりとしか見えなかったが、暖かな日の光だけが歪むことなくストレートに降り注いできたので窓にもたれながらプチ日向ぼっこをした。暖かな日の光を堪能してからはベッドに座って待っていたが来る気配がない。ぼーっとしていた時、部屋の箒笥が目に入る、そうだ、部屋中の箒笥を開けてみようかな。これだけあれば何か面白いものが見つかるかもしれない、小さなトレジャーハンターとなつて部屋に置かれた宝の山にハンティングしてみた。

しかし客室なのか箒笥や物入れなどには一切物はなく、綺麗に掃除された引戸と何度もここにちはする結果となり、かなり期待はずれな結果に終わった。

RPGの勇者もこんな感じなのかな？王宮とかで並べられた瓶を割って何も出なかつたらがつくりするものなのか。そう思うならこんな感じなのかな。

時間を潰そうにもこれ以上することなんてない、携帯もないというか手持ちの物が何も無い。

かといって枕を投げてみたり広い部屋なので側転してみたりこういう家でするべきではない非常識なことは思いつく。

「もう一眠りするかな」

ふらふらとベッドに向かう、寝れなくともゴロゴロしてるだけでも時間は潰せるかもしれない。

ベッドの前まで来る、こう正面から見ると本当に大きいな。枕も頭三つ分はあるんじゃないか？

思いっきりダイブ、ばすんとベッドは衝撃を受け止めてくれた。芋虫のように体を這わせて枕の方へ行くと顔を枕に埋めた。息がでなくて苦しい、それと同時に変わった匂いが顔を覆う。臭くはないけ嗅いだことのない匂い。何か匂いでもつけているのか、似ているものを挙げるならならば柑橘系といった具合か、そんな匂いを漂わせる。

体がそろそろ限界のようで枕から顔を離して酸素を取り込む。吸ってー、吐いてー、吸ってー。いつもより空気がおいしい気がするの、また吸ってー。吐いてー。吸ってー。

．．．やっぱりこれは夢じゃない。苦しくなる、匂いもする。これが夢なものか、馬小屋の時のあの感触から夢じゃないことは薄々気づいていたがやっぱりこうしてみると夢である方が不自然なことも多い。

夢の中で夢を見た、その夢もまたとんでもないリアルさがあったなんてよくよく考えればおかしい。五感が既に夢であることを馬小屋で否定していた。あとは自分の気持ちなのだ、これをどう捉えるかだ。

「僕は．．．勇者なんだな」

よくわからないけどこの世界では勇者。けど僕が勇者なんて夢じゃないと成立しないと思う。

「こんなのが勇者か」

夢の中でも情けなく負けてしまった。現代のもやしっ子代表みたいなものなのに。

どうなるのかな、この先。

もしも、夢じゃなかったらこの先僕はどうなるのだろうか？魔王を倒すために危険なダンジョンやアジトに進んでいってそこで敵と戦闘になるのだろうか、あの化け物に襲われた時のように。夢を思い出した時体が瞬間的に縮こまる。

たった一撃だった。この世界の化け物のタックル一撃で動けなくなる。僕にとってはされど一撃、完全な致命傷だった。かといってあれを避ける瞬発力もない。あのままだったら完全に死んでいた。全くもってダメだ。こんなのが勇者なんて。

ふとドアの方から乾いた音がする。誰かノックしたらしい。

「勇者様！起きてられますか？」

聞き覚えのある声、金髪青年君の声だった。

夢じゃない可能性があるなら誠意ある接し方でいこう、心にそう決めた。もう既に馬小屋で思いつきりタメ口で話していて手遅れな感じもあるけど。

「起きてますよ」

返事に答えるとドアの開く音がして中に青年が入ってくる。

先ほどの貴族服同様の膝あたりまで伸びる紺色のスーツ、前のボタンを留めていないので下の白色のシャツが生えている。下は膝下あたりまでしかない紺色の半ズボン。襟はきつちりと首が完全に隠れるまでたっている。

ベッドから降りて青年の方に近づく。僕の元気そうな様子に安堵の表情を浮かべていた。

「申し訳ありません、私が勇者様の事を考えずに先走って」

そう言っ手て手を胸に添えて45度くらい頭をさげる。この世界でも頭をさげることが謝罪を意味するのか、異世界の文化もまるっきり違う、ということもないことにすこし安心した。

「いえいえ、こちらが勝手に酔ってしまっただけなので、もう大丈夫ですよ」

「それは良かったです！．．．それと、あの、急に丁寧な言葉遣

いになられましたね」

不思議そうに聞いてくる。「夢の中だから何してもいいと思っ
たからですよ」なんて言えるわけがない。

「いやまあ、あれですかね？まず勇者として言葉遣いから綺麗に
していかなくてはな、と思っ」

あははは、と笑う。口から出たのはもはや誤魔化しではなかった。
何を言ってるんだ自分は、飲み込み早。と自分に突っ込んだ。変に
疑われなければいいがと思ったが心配は無用だった。

「勇者としての自覚ができましたか！勇者様！ローウェン感激の至り
です！」

青年は例の向日葵のように満開の笑顔。なんとも眩しい。とりあえ
ず誤魔化したことに胸をなでおろす。ところで最後のローウェン、
これが名前なのだろうか？

「それは良かったです．．．えっと、ローウェンさんでいいのかな
？」

「申し訳ありません！紹介が遅れました！」
軍人のように素早く直立不動になる。その身のこなしに訓練されて
いる印象を受ける。そこから右腕を胸の前で水平にして深々とお辞
儀した。

「名前はローウェン・ローダンセ、不束者ながら帝都カラルコム騎
士団の隊長を勤めています。歳は18歳です」

先ほどの柔らかい声色から一転、はつきりとした力強い声。これが
彼の本当の姿なのかもしれない。騎士としての彼。18歳ながら団
長、団長がどれほど重く大変な役職かはわからないが、きつととて
つもない苦労と努力の賜物なんだろう。

「おわかりいただけたでしょうか？」

「ああ、はい大丈夫です」

また声色が変わりいつもの中性的な柔らかい声に戻る。ぱっとテレ
ビのチャンネルのように態度が一変するのはやはり騎士の訓練の成
果なのだろうか。

「勇者様は敬語でなくとも大丈夫です、あとそこにあります服とズボンは勇者様の物です」

なんとなくそんな気はしていた。机の前に移動して服とズボンを手に取る。着ている半ズボンと短パンも夢のせいか汗でぐっしより濡れているので着替えるにはちょうどいいかもしれない。

「一人で脱げますか？お手伝い必要ですか？」

「あ、大丈夫」

敬語を忘れて素で返した。まさかこの歳になって同じ歳の人に脱衣を手伝ってもらうのはごめんだ。でもローウエンみたいな顔立ちの良い子に手伝ってもらえるのは、ある意味ご褒美なのかもしれない。僕にはそんな趣味はないが。

シャツを手にとってみる。いつも着ているものよりは微妙にゴワゴワしていて硬い印象を受ける。たが着る分には大した問題ではなさそうだ。

ズボンの方もジーパンをより厚手にした感じだが動きにくいわけでもなさそうでここにある衣類に関しては問題なかった。問題があるとすればこれかな。机から視点を下げる

「靴、か」

気づかなかつたが机の下には膝下あたりまである皮の靴も置かれていた。見るからに普段とは違う質量と高級感を漂わせている。

現状靴がないのでこれを履くしかない、仕方ない。ゆっくり足を入れていく。

靴底に足裏がつく。いつの間測ったのかは知らないがサイズはピッタリ。しかし普段軽いメッシュの靴を履いている僕からすれば足に小さい重りがついていているようで、とても走り回ったりできそうになかった。

「靴が合わないでしょうか？」

ローウエンは靴を履いたまま首を捻っている僕を見て察してくれた。

「サイズは合うんですけど、どうも皮の靴は苦手で・・・」

「そうですね・・・それならもうひとつあることはあるのですが・・・

「
そこから言葉を濁すローウェン。どうして濁してしまうのか、恐る恐る聞いてみた。」

「なんですか？」

「勇者様がお望みなら持つてきますが、サンダルです」

「サンダル？」

夏に海とかプールに行く時に履くあれか、楽に履けて靴下もいらないから今もコンビニ行く時とかなどには重宝させてもらっている。正直楽に履けるのでサンダルの方が面倒臭がり人間的には好みなのだが、どうしても憚れたのだろうか。自分なりに脳を働かせて考えてみるに多分客に勧めるには少々ラフすぎると思ったからじゃないだろうか。それなりに的を得ていそうなのでほくそ笑む、自己満足。僕は気にしないけど。」

「別にいいですよ、サンダルで。寧ろそっちの方が好きですかね」

「わかりました、ただいま持つてきさせます。」

持つてこさせる？誰かに頼むのだろうか？

疑問に思った時にはすでにローウェンは行動していた。

「サンダルを持つてきてください、今すぐに」

ローウェンはドアの方へ騎士の声で命令する、敬語で命令しているので命令というには少し違和感がある。するとローウェンの声に反応してドア越しに「ハッ！」という野太い男の声が聞こえたと同時に、バタバタと走り去っていく足音がだんだんと音が小さくなっていった。

「すみません、騒がしくて」

「・・・いえいえ」

ドア越しに人がいたのか、先ほどのローウェンの「一人で脱げますか？」を聞かれていなければいいがと淡い期待をするが、足音がかなり小さくなるまで聞こえていた点、小音で漏れていたかもしれない。顔が少々火照るのを感じる。恥ずかしい。

「しかし改めて見ると普通の方ですね」

そう言いながら背中からぐるりと半周して僕の前まで来る。全身舐めまわされるように見られるというのはこうゆうことか、落ち着かない。

「どんな人が出てくると思ったんですか？」

少々皮肉を込めて返す。僕が悪かったなという意味を込めて、ただ反面ハズレくじを掴ませてしまったみたいで申し訳ない気持ちはないこともない、実際弱いから。

「もっと屈強で男らしい方かと」

何気なく答えてきた。予想通りの答えだがそれは裏を返せば僕が屈強でなく男らしくないと捉えることも出来る。

わかつてはいる、自覚はしているけど面と向かってそれを伝えられるととても心に刺さる。軟弱で女々しい男のハートを突き刺すには十分すぎる刃だ。凹む。

「ですが良かったです」

不意に近づいて来た。少し見下ろした所にローウエンはいる。僕とローウエンの間は拳一個分くらいだろうか？なんだろう少しドキドキする。

ローウエンの顔を近くで見ると肌も透き通るように白くて綺麗で仄かにいい匂いがする。でもやはり黄色の眼が視界から消えることはなかった。目は綺麗で吸い込まれそうな奥深さがある。でも底は見ることができない。このまま吸い込まれ続けたらどうなることか、きつと抜け出せなくなる。そんな何かも分からない場所に手を入れる勇気は僕にはない。

ローウエンは少し背伸びをして僕と先ほどよりちよつとだけ顔が近くなる。数秒石のように僕らは固まっていたが3度目の向日葵スマイルを見せた。

「勇者様、優しそうですし」

ローウエンはそう言ってこちらに顔を向けたまま背伸びをやめてゆつくりと後ろに下がる。

「あと私に対しての敬語も禁止です、私はあなたの従者なんですか

「ら

「従者？」

「それに関しては後々まとめてお話します。」
本当にわからないことばかりだ。

よくわからないけど、とりあえず僕は前を向いて歩けばいいのかな？
右も左もわからないことばかりだけど、とりあえずローウェンが
いて僕がいて。僕が軟弱で女々しいけど、優しそうな勇者。

「……わかりました。」

「ゆーしゃさま！」

ごめんごめんと謝りつつ改めて僕は、勇者として第一声を発した

「よろしく！ローウェン！」

これでいいのかな？

6話 dog or cat

「サンダルの履き心地はいかがですか？」

サンダルに足を通すと、先ほどの靴よりも冷たさを感じる。素足に直接だとやはり冷たいか。

持ってきてもらった濃い黄土色のサンダルは草履のような形ではなく靴底から皮製の半円が五つ伸びている。そこに足を通して、そのあとは足の甲の金具でベルトを締める要領で一つずつ半円小さくしてサイズを合わせるタイプのサンダルだった。ゴム草履をイメージしていた僕にとっては思っていたものとは少し違った。しかしこれならサンダルとはいえ歩きやすそうだ、

足首の金具から伸びた紐を引っ張り最後の調整をする。サイズは問題なしか。

試しに軽く跳ねてみる。違和感などは感じない、寧ろぴったりと足に馴染みつつ、適度な開放感が心地よく、皮の柔らかさが足全体を優しく包んでいる。この半円サンダルの方が普段のスニーカーよりも履きやすいと思ってしまうほどに。

「思ってたよりも、しっかりしてるんだね」

「それはよかったです」

一通り着てみたがなんとも奇妙な格好だ。春先とは言わないが秋頃の服装でもない長袖長ズボンにサンダルスタイル。いつどんな時にこんな風に着ることになるのか？想像がつかない。

辛うじて想像できるのは冬間近に冷蔵庫に何もなく仕方なしに近くコンビニに駆け込む時こんな格好をしていそうだ。

「とても凛々しいですよ、勇者様」

目を輝かせて言ってくれるが僕は凛々しい要素をどこからも感じられない。顔もだらしのないこの全身から一体どこを見てそんなことを言ったのか。

「さてお着替えも済んだことですので、行きましようか」

「．．．ああ、王様のところか」

当初の目的を忘れていた。この部屋だけでも色々でありすぎてすっかり記憶から抜け落ちていた。

王様か．．．ということはそこで正式に勇者と認められることになるわけか。王様って本当に大事。

「では向いましょうか、玉座へ。」

ローウエンはいきなり僕の手を掴む、困惑する僕を尻目に握ったままドアを開けて廊下を歩く。

「えつとなんで手を？」

「迷子にはさせません」

させません、この言い切りからとてもつよい意志を感じる。着替えの時もそうだったけどどこか子供扱いされているようだ。顔もローウエンの方が童顔だし身長だって僕の方が高い、むしろ僕がローウエンを子供扱いする方が絵としても納得のいくものになるのではないか？

ビジュアル的なものが第一に浮かぶ、だってこの状況恥ずかしいから。子供扱いは本当に恥ずかしい。まるで何も出来ない子みたいじゃないか。確かにこの世界ではまだ何も出来ないけど、一応歳だって離れていないんだし。

悶々として、それから葛藤。これを言うべきか否か。こちらを思っ
てやってもらっているの言いくい。周りから見てちっほけな悩み、けど本人にとっては重大なこと。くだらないことに頭を働かせて無駄なエネルギーの消費だと言われても、頭は止まらないだろう。考えて考えた結果

「ごめん、一人で歩けるよ」

握られた手を振り払い少し距離をとる。ローウエンは戸惑いの顔を一瞬見せたが理解したのか優しく微笑んだ。

「すいません。配慮が足りませんでしたね」

きつとローウエンだったらそんな顔をするだろう。予想していたが

その通りだ。そう思って言うのを躊躇った、やっぱり僕の気持ちを探して優しく謝ると。接した時間は長くはないがこれくらいのことを読める。こうなると何が起こるかというと気まずい空気が流れる、かと思っただが。

「そういえば私と歳も同じそうに見えますが、勇者様は何歳でなのでしょう？」

ぐいっと一気に近寄ってきたものだからそれに合わせて後退する。

距離が近い、と小声で伝えるとローウェンもすいません、とそう言いながら一歩後ろに下がった。

「18歳だよ、ローウェンと同じ」

「おお！同い年！久しぶりに同い年の方とお話できました。」

目の前のローウェンは地元同じみたいなノリで嬉しがっているが同い年って割といるもんじゃないかな？

「そんなに珍しい？同い年」

「帝都カラルコム騎士団の指揮官の任を授かって以来、周りの方が年上ばかりの環境だったので。」

「それって何年ぐらい？」

「2年ほど、でしょうか？副団長さんや周りの方がどうも僕と歳が離れていて部下なのに敬語になってしまいます。トップの存在なのに威厳がないのが悩みですかね」

ははは、と乾いた笑い。先ほどのサンダルの命令が敬語なのも歳が離れた部下への彼なりの配慮というわけか。威厳がないと言っただが既に声が出来上がっている。声だけが威厳あるのが悩みとか出されても形から入れば徐々に出来上がるんじゃないかな？

「ローウェンは威厳あると思うよ」

「ありがとうございます。」

一礼、からの直立。

「僭越ながら、勇者様に質問よろしいですか？」

「答えられる範囲なら」

急で驚いたがなんだろう？ドキドキする。名前とかかな？そうい

えば名乗ってなかったし。質問だけが人に関心を持ってもらえるのが僅かながら嬉しい。

「犬派ですか？猫派ですか？」

「え？」

予想斜め上だった。楽しい会話で和ませようとしてくれてるのかと最初に思ったがそれにしてもチヨイスが謎だ。

「えっと、なぜ急に」

「やはり必要なことなので」

必要なこと？大事なことなのだろうか？

もしかしてこの世界には犬派と猫派の派閥闘争でもあるのだろうか？犬猫の魅力を血で語り合う光景は想像するだけでもはやギャグだ。．．．まさかこの世界はそんなつまらないことに終止符をうつために勇者を呼んだのではないか？！

頭を横に振る、流石にそれは考えすぎか。

「何に必要なの？」

「やはり人には好き嫌いがありますので」

部屋に動物でも置いてくれるのかな？なんて考える。質問に答えるなら、犬か猫．．．そうだな。昔友達が飼っていた犬が僕に結構懐いて、戯れてた思い出があるから。

「犬かな」

「わかりました」

ローウエンのありがとございました、からの一礼。やはり無駄がない。．．．犬と猫か、せっかくなのでこちらからも聞いてみるか。

「ローウエンはどっちなの？」

「命令したりするのが得意なタイプじゃないんですよね。」

そうなる自由気ままな印象のある．．．

「猫派？」

「そもそも一緒にいるのも落ち着かないんですよ。」

「根本から苦手なタイプか」

「そうなりますね」

たわいもない雑談かと思っていたが少し引つかかる、がそれ以上深くは考えなかった。ローウェンが前を向いて歩き出したのでその少し後ろを同じ歩幅でついていった。

現代文の教科書の詩人が「分け入っても分け入っても山」なんて俳句を作っていたのを不意に思い出す。山の中分け入ってもそれは山だろ、なんて突っ込んだ記憶があるし、そもそも季語もないものをなぜ俳句と言ったのか。けどもインパクトはあったのかこうやってキツカケさえあれば思い出せる。俳句ならざるモノ、だったからこそ記憶に残るものだったのだろう。

ところでなぜこの俳句を思い出したか、キツカケはこの城の内部のせいだ。

「ここ、前も通らなかった？」

「いえ、初めてですよ」

壁や天井は汚れを見つける方が難しいくらい真っ白で、通路の真ん中には真っ赤なカーペットが敷かれている。脇には寝ていた部屋と同じドアが何個も並んでいた。これがいつまでも続いた。階段を登っても見える廊下はこの廊下。そこを進んで階段を登ってもまたこの廊下。所々に大きな花が飾られた花瓶や油絵や水彩画など綺麗な絵が飾られたり、半袖半ズボンのラフな服装で壁を雑巾らしき布で磨いている人を見かけたが基本的にこの廊下。分け入っても分け入っても綺麗な廊下。

「いつ、つくの？」

「このお城は縦に長いですから、お疲れかと思いますが後3階登ります」

嘘だろ、既に15階は登ったぞ。いや、16、17かな？

現代人ならこの回数絶対エレベーターを使用する。ご丁寧に階段、なんて選択肢を取るのはいエット中の人か健康志向全開の人だ、それか閉所恐怖症。

歩いているとはいえこれほどの階段を登れば自然と息切れする。足の上げ下げは時として走るよりも足の疲労を感じる。要は疲れた。

「着きました、勇者様」

最後の階段を登りきる。疲れからかふーっと大きく息を漏らしてしまふ。しかし不思議なのはお疲れ様です。というローウエンの一言と笑顔の二つだけで自然と疲れが吹き飛んでしまったこと。

眼前にはこれまでの廊下とは違い白い壁が行き場を遮っていたがよく見ると同じ色の扉が一つだけ存在し、鎧を着た男2人がそれを挟むように立っていた。ドアも白いのか、ドアノブまで白だったらこれはわからなかったな。

「帝都カラルコム騎士団団長、ローウエン＝ローダンセです。」

ローウエンは右の扉の兵士の前まで行き、威厳声で話し始めた。

「団長、お疲れ様です。」

2人の兵士もまたローウエンと歳は離れていそうだ。若くても20は超えていて、年上であるのは明白だ。この2人だけなので断定はできないが、確かに優しい性格なら敬語で話したくなるのも納得かもしれない。

「勇者様の件で、王への面会を求めます」

「その件については話しは伺っています、どうぞ中へ。」

兵士は2人で扉を引いた。かなり丈夫に作られているのが重々しい音を鳴らしていた。そして見えた景色。

廊下の赤いカーペットが一直線に敷いていて、その先には椅子があった。玉座、とすぐにわかる異様さを放つそれに堂々と腰掛ける人物。

「おお！あなたが勇者様ですか！お待ちしておりました。」

意外なことに想像の - 30 歳くらい若いハリのある声。その人物は少しずつ近づいてくる。こちらもその距離を詰める。白の服に身を包み風格の違いを見せつける堂々とした立ち振る舞い。

「お連れしました。王」

「く苦勞」

相対した時、その大きさと力強さを一層感じた。

頭一個分身長が高く体格もとてもがっちりしている。長袖長ズボンの格好なので見えないが筋肉は隆々だと確信している。

その全身から溢れる「王様」が神々しい光までもが見えるようにさせた．．．いや、これは物理的に見えている。頭から。

「帝都カラルコム王、ビグマルグ4世です」

目の前の王、ビグマルグ4世は綺麗な頭だった

6話 dog or cat (後書き)

犬派です、でも猫も好きです

7話 昔々のお話

王が差し出した手に応じる。とてもゴツゴツとしていて力強さを感じる。大げさかもしれないが今本気で握られたら手の骨が砕けてしまいそうだ。

にこやかに笑う顔はハリウッドで出てきそうなダンディな風貌。その顔立ちに輝く頭がむしろフィットし、一層ダンディさを醸し出す。外国人によくいるその頭が似合う男性だった。

「どうぞ、こちらへ」

ビグマルグ王が手を出す方向、そこはカーペットから外れていて、玉座の脇に白い木製の椅子と机がちんまりと置かれていた。椅子は三人分で机の上には持ち手のついたコップらしき陶器が椅子の前に置かれていて、その中には湯気を立てている茶色の液体が並々注がれていた。

促されるまま椅子へと向かう、近づくとつれ何か果実の匂いが漂う、原因なんて大体想像がつく。椅子の前まで来るとコップの中の液体に顔を近づける。少し酸味のきいた果実の紅茶のようなものだろうか？

「フラソの紅茶が気になりますかな、勇者様」

すでに着席しお椀を持ち上げて王は尋ねてきた。

「フラソ．．．ですか？」

「帝都で一番取れる果物でして、味はさっぱりとした甘みと少々癖のある酸味が特徴です」

確かに、臭い自体は喉を通してみたくなる甘酸っぱい匂いだが、椅子に腰掛けもう少し覗いてみる。湯気に邪魔されて見えづらいが液体はかなり濁っていてコップの奥の沈殿物が辛うじて見える。

「失礼します」

僕の左にローウェンが腰掛けたようだ。左にはローウェン、正面が王。ローウェンの席は心なしが僕の席と近く王、僕とローウェンと

いう構図ができていた。

「勇者様、お口に合うかわからないですが温かいうちにどうぞ」

ローウエンは既にフラソ紅茶に口をつけていた。美味しかったのか、喉が渴いていたのか一気に飲み干して、ふうふうと小さく息を漏らしていた。幸せそうに飲む姿を目の当たりにすると、美味しそうに見える。口に合わなかったら、合わなかったということだけなんだから。未知の味を口に入れる覚悟を決めてコップを持ち上げて茶色の液体を口内に注ぎ込む。これは・・・!?!?

「いかがですか？」

「すごく美味しいです」

はちみつれもん、が味として一番近いだろうか。はちみつみたいにそこまで甘くはないもののレモンの酸っぱさを引き立てる甘さが絶妙だ、いつもコンビニでは紅茶を買う機会がないがこれならついつい手にとってしまう。

「それはご安心しました、おかわりもありますので是非」

机の真ん中の円形の入れ物があり、注ぎ口がこちらを向いて湯気をゆっくりと立ち昇らせている。これにおかわりがあるのだろう。

「ではいただきます」

残った分を一気に飲み干して入れ物に手を伸ばし、コップに注ぎ込む。新たに注がれた紅茶は湯気と共に甘酸っぱい匂いを運んでくる。

「勇者様、この度は我らの召喚に応じていただき大陸全土の間人を代表して感謝を述べたいと思います。ありがとうございます。」

王は深々と頭を下げる、王様に頭を下げてもらうなんて恐れ多い。思わずこちらも頭を下げてしまう。しばらく僕と王は頭を下げたまま固まる、どうやら僕が頭を上げるのを待っているのかもしれない。頭を上げると王は頭を上げて話を続ける。

「何からお話しすれば良いかあれこれと考えていましたが、勇者様の疑問にお答えする形の方が良いかと思いましたが、なので私に質問を下されば答えられる範囲でなんでもお答えします」

何を聞きたいのか、自分に問いかける。数秒考えを張り巡らせた結

果この世界に來た理由、これじゃないかな。召喚したというのならそれに基づく理由があるはずだ。僕が必要とされた理由、ここで何をすれば良いのか、それが一番知りたい。

「召喚した、と言いました。僕が何の理由で召喚されたのですか？」
王は目を瞑り黙った、唐突なことだったので眠たくなったなんて下らない事だと思ったがそうでもないらしい。

「勇者様、少しお話が長くなりますが、それをお話しする前に、この世界の歴史を少し物語りたいと思います」

「歴史？」

「はい、劣等感や嫉妬心などの人間の負の感情が作り上げた悲惨な歴史を、そしてその歴史から生まれた今を。」

王はゆっくりと、淡々と語りだす、この世界に起こった今までを .

「今から50年前、魔術研究の末に新たな魔術分野が発見されました。従来の魔術分野には紅魔術、蒼魔術、翠魔術、土魔術、光魔術と五つの分野に別れていて、魔術それぞれが特有の力を有していました。火は敵を焼き払う豪快な魔術、蒼は怪我人を癒す治癒の魔術、翠は元気を与え勇気を力に変える補助の魔術、土は大地に語りかけ敵を封殺する封印の魔術、光は生命の暖かさや安らぎを与える加護の魔術。そんな魔術分野に新しく追加された魔術、それは闇魔術と呼ばれました。力の奥底が見えない未知なる魔術として魔術師たちの好奇心を駆り立てていましたが . . . この闇魔術を扱うには適性がある程度ないと扱えないようで、どれほど名のある魔術師だろうが適性のない者には扱えない、逆に剣士でも魔術をうまく使えない人間でも適性があれば訓練することで自在に使いこなせる特殊な魔術でした。

では闇魔術はどのような魔術なのか、簡単に申し上げますと人の死や負の感情に働きかける魔術でした。当初は人の死に触れると言い

ましても人間の死期を体で感じ取ったり負の感情を軽く引き出した
りとそれほど大きなことはできない未熟なものでもあります。

闇魔術は適性のある者たちですぐさま教会が設立され闇魔術の神フ
オリスを祀り、他の魔術と肩を並べて正式な魔術として大陸からも
認められるようになりました。

その時闇魔術教会設立の中心になった男こそ、我らの宿敵の魔王な
のです。魔王はまだ未熟で無力な新興魔術を研究に研究を重ねてど
んどんとその力の増幅を図っていました。

しかし当初は一部の適性のあるものしか扱えない特別な魔術と注目
を浴びたもののその無力さに周りは「闇魔術は使えない無駄な魔術」
とさえ称されました、事実5年経ってもまだできることが発見当初
と変わらなかつたとされています。

そして今から35年前、闇魔術が発見されてから15年の月日が経
ちました。闇魔術教会のリーダーに収まった魔王が恐るべき出来事
を起こします。それは亡くなった12歳の子供を生き返らせたので
す。彼は研究に研究を重ねた結果闇魔術の力を最大限にまで引き出
すことに成功したのです。ですが生き返らせたと言ってもまともに
喋ることもできず這いつくばって移動したり、飛びついて噛み付い
たりとこの時点では「人間の蘇生」には程遠いものでした。

この事件は大陸中にすぐさま広まりました。「ヒトの蘇生」を可能
にした強力な魔術は賛否両論となり、大陸はこの魔術を巡って真つ
二つとなりました。

賛成派は一部の貴族などです。

奴隷同然に働かせていた小作人を蘇生させて利益をあげようとした
かつたのが彼らの魂胆です。

それに真つ向から反対したのは光魔術です。光魔術にとって死は『
恐れ多い物』『忌み嫌うべき物』とされ死に関わる魔術を研究する
のはタブーとしていました。そんな思考が根本にあつた光魔術にと
つて闇魔術のしていることは『悪魔の所業』なのです。

また他の魔術も少なからず死に対してよく思わない魔術も存在し、特に蒼魔術はどちらかというところ光魔術の考えに近かったかと思いません。

ただ全ての魔術がそうでなかったとだけ言っておきます。

．．．いえ、本当のことをお話しします。これは建前です。当時は光魔術が魔術の中でもとりわけ力が強く、多くの民衆に支持されていました。そんな光魔術にとって闇魔術は自分達の不可能な領域を操れる、ましてや死に触れられる魔術。これだけで光魔術にとっては脅威でした。ゆくゆくは自分たちを超える存在になるのかもしれない。そう考えたのでしょうか、今まで認可していた闇魔術を事件を機に突如非難し、闇魔術を認めない姿勢となりました。そして事件は起こります。

今から34年前、闇魔術が発見されて16年。遂に光魔術は力で貴族を押さえ込み闇魔術への弾圧を決行。当時の皇帝ドルトド1世と光以外の魔術の黙認もあり邪魔されることなく大陸中の闇魔術師に対して迫害を続けることができました。至る所に存在した闇魔術師達を村や町から追い出し、金銭取引はおろか会話にすら応じないこともあり、拳げ句の果てには拷問さえも行われました。

一部の民衆などの中にはこの行為を非難した人間が集い『闇魔術支援会』を秘密裏に結成。闇魔術にひっそりと協力するようになりました。

巷では闇魔術に協力する人間がいる、そんな噂がちらほらと流れるようになりました。そのため光魔術は民衆に対して『死を振りまく禁忌の魔術』と語り、弾圧賛成派の民衆を扇動。弾圧運動を一気に広げて迫害を一層強めました。

ほぼ大陸中の人間を敵に回した闇魔術師達は非暴力による抗議を行いました。声は通らず大陸の最北端へと追い詰められていきます。逃げ場を失った闇魔術師達は最後の希望の『闇魔術支援会』に縋ります。そこで彼らが出した賭けに近い希望は、大陸から船を出し北

に小さく浮かぶ小島に逃亡することでした。

魔王はその賭けに乗じるよう説得し海に身を投じました。当時の航海技術は不安定でましてや荒波が絶えない北の海、まさしく賭けだったのです。

大陸のほぼ闇魔術師達が北の小島へと船を漕ぎ、なおかつ大陸の闇魔術達は見つけ次第殺されてしまい以後闇魔術師はこの大陸から姿を消します。

それから17年、今から17年前の事です。闇魔術は死に絶え消滅したかに思われました。しかしこの年になると『人間を蘇生させることができる魔術師』の噂が流れます。光魔術はこの噂をすぐさま聞きつけ、捜索させます。捜査の結果それは紛れもなく魔王率いる行き残った闇魔術師達だったのです。

ですが少人数でひっそりと活動するようで光魔術が調査を始めるとぱったりと噂は途絶え足取りがつかめずに調査が終わってしまいました。

そして、2年が経ちます。今から15年前です。

突如帝都最北端の大都市 エブルルスが大軍に襲撃され、陥落。敵の手に落ちてしまいました。もうお分かりかと思いますが大軍の正体は魔王率いる闇魔術軍です。彼らは復讐のためこの地を攻め滅ぼしにやってきたのです。

彼らは北の小島で闇魔術の研究と共に闇魔術師だけによる王国を小規模ながらも建国しました。そして彼らは辿り着いてしまったのです、自然の法則に真つ向から逆らう禁忌の魔術へと。彼らは『完全なる人の蘇生』を目指し年月を費やしそれをある程度形にすることができたのでした。初めて蘇生させた時とは違いこの時に蘇生させられた人間は人の意志のままに動く死体へと変わりはてました。意志を持つと言っても行動を術者がインプットする。するとインプットされた『意志』通り動く。我々はそれを死体兵士と呼びました。

死体兵士の恐るべきところは殺した人間に術をかければそれだけで兵を量産できる点です。彼らにとって戦争で相手を殺すことは相手の戦力を落とすと同時に自軍の兵力の増加に直結します。いくら死体兵士を殺そうがこちらが多数の被害が出ればそれが敵の戦力になる、痛みも感じず獯猛に剣を振るうことだけを教えられた殺人兵器、それが死体兵士です。

帝都は急いで軍隊を編成、闇魔術を完全に滅ぼすべく幾度となく魔王軍と激突しました。しかし兵士の実戦経験不足や高官の暗殺事件、何より圧倒的力を持つ死体兵士など様々な要因が重なり各地で連戦連敗、遂には我がカラルコムを残し、他の大都市は全て陥落してしまいました。

当時の皇帝、ビッグマルグ3世．．．私の父は残存戦力を大陸中から集う一方、とある伝説の物語に登場する『勇者』という存在に目をつけます。この伝説は勇者が巨大で邪悪なる竜を打ち倒す物語で民衆にも広く知られています。我々王家の秘蔵図書室にもあるのですが、原本なのか普通の物語にはない一言を言って締めくくられています。「大陸に危機迫る時、勇者を呼べ。勇者を信じ、勇者に縋れ。さすれば勇者は応えるであろう」

神などは一切信じなかった先代王がこんな伝説さえもあてにしようとしたのですから、当時どれほど切羽詰まった状況だったのかが推測できます。

秘蔵図書室にある数千冊の本を一冊一冊読み漁り勇者を呼ぶ方法を探し出します。そしてついに発見されて勇者様を呼ぶことに成功しました。それが当時18歳の初代勇者様です。初代勇者様は最初は戸惑いつつも、なんとかカラルコム周辺の敵を撃破、様々な仲間を引き連れられ大都市を占領した魔王軍を破竹の勢いで撃破され大陸中の魔王軍を打ち滅ぼしました。しかしここで終わることはなく、北の小島、魔王軍本拠地に勇者軍として乗り込み魔王軍との最終決戦の未殲滅することに成功、勇者様は全大陸中から英雄として称えられました。

そして今現在、勇者様を呼んだ理由は他でもありません。魔王軍と戦っていただきたいのです。殲滅したはずの魔王軍は一ヶ月ほど前にこの大陸に乗り込み芸都エブルスを占領。他の大都市にも侵攻作戦を展開しています。今度もまたあの死体兵士を連れてこの大陸に再び悪夢を見させようとしています。どうか、大陸の人民を救っていただきたい」

勇者の対義語は魔王みたいなものかもしれない。予想通り敵は魔王のようだ。

今の所なんとなく、全体の7割は理解できたというところか、今回が二回目の侵略。虐げられてきた恨みを晴らすべく再びこの地に乗り込んできたわけか。

そして気になるのが初代勇者の存在。この世界と僕のいた世界との時間の流れが同じかどうかはわからないがこの世界の15年前には僕と同じようにこの世界に勇者として呼ばれた人物がいるのだ。気にならないはずがない。しかも世界を救っている。正直その人に今回も頼んだ方が早いと思うのだが。

まだ初代勇者らしき人物も見えない。王と一緒にいてもおかしくないような気もする。ということは・・・恐る恐る聞いてみる。

「初代勇者は・・・今どこに」
王はやや伏せ目にする。

「初代勇者様は世界をお救いになった後幻のように消えてしまいました。姿を見たものはいません」
やはりここにはいないか、薄々感じていたが的中して嬉しい事ではない。

それにしても消えてしまったとは。もしかしたら勇者として呼ばれた身、勇者の役目を果たしたので元の世界に戻れた、そんな可能性もある。

それなら僕にとっても悪いことではない。帰れるものなら今すぐにも帰りたい。しかしこの世界に留まる選択をして、この大陸のど

こかへ消えてしまった。この可能性もないわけではない。真相を確かめる。

「初代勇者はこの世界から消えてしまったのですか？」

「わかりません、ただある日急にいなくなっていました。」

唐突なら前者の方が可能性として高いと推測、そうなると僕が元の世界に戻るにはただ一つ

勇者として魔王を倒す

これだけなのだ。

確定的情報ではない、あくまで推測。だから他にも考えてみるが……。

「えつと魔王を、倒す……以外」

言葉が詰まる、いろいろ思考してみたが結論魔王を倒す他ない。勇者として呼ばれたのに「勇者やりません」と怖くて言えない、どんな反応を返されるか予測できなくて尚怖い。しかし、僕に倒せるかどうか……。またあの夢を思い出す、夢なのにここまで引きずるのはあのリアルさ故なのかもしれない。

「勇者様、急に理解しようとなさなくて大丈夫です。それと先代勇者様も今この世界におられる可能性もありますが、勇者様が今の勇者様です。」

少々困惑していた僕にローウェンは声で寄り添ってくれる。ありがとうと一言伝え、覚悟を決める。改まって背筋を伸ばしている王は、再度確認を始めた。

「改めて勇者様をお願いします。どうか世界をお救いください。」

初代勇者が何者かはわからないが、僕と同じ18歳の青年なのだ。僕にもできないわけがない。

「世界を救えるかわかりませんが、僕でよければ」

「……決断、ありがとうございます！」

「勇者様！ありがとうございます！」

深々と頭をさげる2人、がやはり下げられるのは落ち着かなかった。僕は2人に頭を上げるよう促した。

「勇者様、早速ですが勇者の儀を！」

「勇者の儀？」

ぴんとこない、なにをするのだろうか。

ローウエンはこちらを向いてその内容をゆっくりと説明してくれた。ああ、なるほど。別段難しいことではないな。聴き終わると早速儀を開始した。

「我が．．．勇者！このたいり．．．大陸から悪を消し去り、この大陸にうま、住まう人民全てを魔の手から救うことをここに誓う！」
玉座に座る王に向かい、高らかに宣言する。玉座は数段の小さな階段の上にあるのでやや見上げる形となった。王は僕の宣誓を聞き終えると満足気な顔をする。よかったのかな？今ので。少々噛んでしまったり言い間違えたりしたが王が特に不満そうでないので大丈夫か。

「勇者様、次に剣先を高く天に突き刺すように高々と掲げてくださ
い」

ローウエンは横から小声で指示をしてくれる。えっと剣は、と。腰に目を落として手をまわすが、空つかみ、ベルトに手が当たる。

．．．あ、服に着替えてそのあとの靴の流れで完全に剣のこと忘れていた。

「勇者様！申し訳ありません！ただいま持つてきます！」

気づいてくれたローウエンは言葉を残してすぐさまこの部屋を出て行った。それを見送った後ゆっくりと王の方を見る。これは儀式、こんなことあつていいのだろうか？神聖なるものがドタバタとしてしまつて怒っているのではないだろうか。

「くっくっくっ．．．」

心配は無用だった、口元を押さえ、肩を小刻みに震わせている。絶

対に笑いを抑えている。
いいのかわれで？

7話 昔々のお話（後書き）

いろいろ出てきましたが今はざっくりで大丈夫です。

8話 瞳の奥に眠る

「すみません、お騒がせして」

笑いが収まったのか落ち着いた口調で謝罪の言葉を入れる。

「いえ、全然大丈夫です」

「あの剣は先代勇者様も使用された剣なのです。儀式にはやはりあの剣でないといけない気がしますので」

先代勇者・・・となると15年以上前に作られた剣なのか。15年以上も月日が経っていたならもう錆び付いていそうだが大丈夫なのだろうか？

「そうなんですか、ですが15年も経っていたら流石に。」

「大丈夫です、あの剣はこの大陸に一つしかない至高なる剣です。」

先代勇者様が旅の始まり前に帝都に逃げ延びた腕ききの技術者を掻き集め、更に最高峰の魔力を流し込んだ至宝の剣なのです、まさしく勇者の剣です。そう簡単に錆はしないでしよう。」

大陸の命運を賭けて作られた剣、というわけか。

「なるほど」

数回の相槌のあと、扉の方に目をやる。流石にあの距離ではすぐに帰ってこれないか。

「・・・ローウェン、遅いですね」

ミスは誰にでもある、仕方のないことなのだ・・・そういえばさっと全責任をローウェンに押し付けたような気もするので一応心の中で謝っておく。ごめん。

「ローウェン団長は若人ではありますが団員からの人望も厚く剣の技術も目を見張るものです、現在カラルコム騎士団内で従者として付き添えるのは彼くらいでしょう」

「従者・・・ですか？」

聞き覚えのある言葉・・・記憶を辿っていくとローウェンがそんな

単語を言っていたのを思い出す、あの時はローウェンに流されたんだっただけ。

「噛み砕いた表現をするならば勇者様の旅の仲間．．．と言ったところでしょう」

となるとローウェンは旅の初期メンバーになるのか。彼なら気兼ねなく接していけそうだし実力も王のお墨付きなら文句はないな。

「彼が仲間なら心強いです。」

「左様でございましょう。」

うんうんと頷きながら返してくれた。どうやら王の信頼もかなり高いようだ、本当に人間として格の違いを見せつけられているような気がする。ローウェンが勇者でいいんじゃないかな？

「ローウェンの方が人物的に勇者っぽいですね」

「．．．そう思いますか？」

冗談めかして言ってみたが、冗談にとられなかったのか、目を細めて尋ねられた。

「彼には見えない何かがある。そう感じたことがありますか？」

「見えない何か？」

「．．．すいません、今のごことは忘れてください」

忘れてと言われて忘れられるほど器用な人間でもない。見えない何か、か。思い当たる節と言えば吸い込まれそうになるあの目、手を入れてしまえば何を掴むかわからない闇、あの時そう表現してしまっただが、多分思い過ぎだろう。そもそも何かも分ならず人の目に闇だの言うのは失礼だと思う、自分を戒める。

「はあ、わかりました。」

若干納得できないが渋々追求をやめた、という感じを出して終わっておいた。

「勇者様に改めて問うても宜しいですか？王としてでなく、1人の人として」

「はい？」

玉座から腰を上げてゆっくりと近づいてくる、やはり体格の大きさ

に慣れないのか、手前までくると体が王の大きさに驚いてしまう。

「勇者様は現状を受け入れられていますか？」

「現状ですか？」

「はい、突如この世界に來られて私のような見知らぬ人間に勇者様と呼ばれ、世界を救うように頼まれているこの現状に、です」

王の氣遣いだろうか、頭一つ分高い地点から僕を見下しているその眼は申し訳なさど心配を含んでいるようだった。やはり1人の人間を自分たちの都合で呼んでしまうことに罪悪感を感じている。實際迷惑もいいところだ、でも怒っても元の世界に戻れるわけじゃない。自分の運が悪かったと割り切つて、帰るしかない。

「受け入れないと．．．進まない気がしまして」

「そう．．．ですか」

僕の答えを薄々予感していたのか、顔を伏せ気味にして言葉を返す。王も現状を受け入れられないと始まらないことなんてわかりきっている筈だ。

「本当にすみません、急に呼び寄せておいて世界を救えと頼んでしまい」

強くがっしりとした腰を曲げて一言一句を噛み締めるようゆっくりと、悲哀の籠った声での心からの謝罪だった。

「．．．えっと、まあ任せといてください！頼まれた以上やり遂げますよ！」

なっはっはと笑いを付け加える、正直なんて返せば良いのかわからなかったのでひょうきんに、前向きに捉えたのを伝える。僕にできる最大のひょうきんだ。

「頼みます！勇者様！この世界をお救い下さい、」

「わかりました、勇者「大変申し訳ありませんでした！」

ドアが勢いよく開かれローウェンが姿を現した。右手には劍を握りしめ、肩で息をしていた。数秒固まっていたが数回の咳払いの後王は玉座に戻りつつ言った。

「ローウェン団長、お疲れ様です。では儀式を再開します」

「さ、勇者様。準備の方をお願いします。」

促されるまま先ほどのポジションに戻る。そうだ、もうやるしかないんだ。ローウェンから渡された剣の鞘を左手で握り、右で一気に引き抜く。刀身の輝きは夢と同じダイヤモンドのように美しく、曇りない銀色はガラスよりも鮮明に僕の顔を映し出していた。あまりの美しさに心奪われ見入ってしまった。あの時は折半詰まっていた状況だったので深くは見えないが、どんな鉱物で打てばこんな純真な物が作れるのだろうか？と疑問に思ってしまうほどに眩しくて綺麗だ。ローウェンに小声で勇者様、といわれ我に返るまで見入ったまま固まっていた。今は目の前の儀式に集中しよう、頭から剣の美しさを払って、剣を天に掲げ王の前で宣誓する。

「我を信じよ、我にす？すがれ、我こそは．．．我こそはこの大陸に平和と安らぎを与える勇者なり」

「勇者様！最後の一文、もつと威勢良く高らかにお願いします！」
唐突なローウェンの注文に戸惑いを隠せなかった。高らかに？威勢良く？．．．多分もつと感情を込めて言えと言っているのだろう、だが僕にそんな症状はない。仮にこれを本気でやるには羞恥心を捨てるしかない。助けを求めて王の方へ向くが王は僕と目があうと一度頷いて何も言わなかった。ダメだ、覚悟を決めるしかない、大丈夫だ。勇者なんだから、勇者を演じているのだから何も問題はない。自分に言い聞かせて二、三回深呼吸の後

「我を信じよ！我に．．．縋れ！我こそはこの大陸に平和と安らぎを与える勇者なり！」

言い切った、でもやっぱり恥ずかしい。厨二病だったら喜んでやっていたが生憎そんな症状は中高通して今まで発症の欠片すら見えていない。友達に一人近い事やっていたのを遠目に見ていた事はあったがまさかこんな形でやる事になるとは．．．思いもしなかった。剣を鞘に仕舞い腰のベルトに挿す。すると横から

「勇者様、素晴らしいです！お見事です」

褒められるのは好きだ、自分を認められているようで嬉しくなる。

しかし今は別だ。黒歴史の1ページにたった今載ってしまった僕の姿を想像させないで欲しい、ついでに僕の顔の温度を上げるのをやめて欲しい。ローウエンの声に耳を防ぎたくなる。

「勇者様、お疲れ様です。様になっていましたよ」

望んでもいない追い打ちをかけられて心はずしりときた。こういつた奇行や暴走をせず地味に生きてきた事が僕の唯一とも言える自慢だったのに。

「この儀式は勇者招来の儀が書かれた本に記載されていた名誉ある儀式なので疎かにはできないのです、ご協力ありがとうございます。」

王は玉座で頭をさげた。途中で普通に中断していたがそこは大丈夫。 . . . だったのだろう。

「さて、今後のお話をさせていただきます。」

「今後？魔王を討伐しに行くんですよね？」

「はい、ですが今すぐに出発というのもあまりに酷なので勇者様の都合がよければ、2日後の朝までに準備等を済ませ、当日昼に出発を予定しています。大丈夫ですか？」

不都合はないし、なによりこの世界を見ておかないとそれこそ不自由しそうだ。2日もあれば色々な所を見て回れるし慣れる時間として申し分ない。

「大丈夫ですよ」

「ありがとうございます」

王は礼を述べてから玉座から腰を上げてこつちに歩み寄ってくる。3度目なのでさすがに驚きはしなかったがやはりその体格には慣れない。

「大陸を、お願いします」

差し出された手、大きくゴツゴツした手を握りしめ、返す

「勇者、魔王を倒す事をここに誓います」

王との誓いを立てて、王室を後にした。

「勇者様」

王室を出て最初の階段を降りようとした時、ローウエンが呼び止めた。

「どうしたの？」

僕の問いかけに答えようと口を開けたが、何故か躊躇い、少し恥ずかしがったようなそぶりを見せてから優しく語りかけてきた。

「私には勇者様と共に魔王を倒す事が出来るほどの実力があるのか、そんな不安と勇者様と共に旅をできる事に対しての少しの期待感があります。変ですよ、魔王討伐にはこの大陸の命運がかかっているのに、旅を心待ちにしている自分が心の中に存在することが。でもそれは勇者様が勇者だからだと思います。馬小屋で出会ってから長い時間は経っていません、ですが勇者様の事が少しずつ分かってきました。そして知れば知るほど勇者様が心優しくて柔らかな方だとわかりました。お仕える勇者が勇者様で良かったです。」

ローウエンは言い終えて一息つくくと急に整った騎士団の敬礼のまま固まる。

「改めて、宜しくお願い致します。勇者様」

旅の仲間として、こちらにも返事を返さないよ

「こちらこそ改めてよろしく、ローウエン。ローウエンが付いてきてくれるだけで、心強いよ」

「そんな・・・自分は」

顔を真っ赤にして俯き恥ずかしがる。満開の笑顔も素敵だが恥ずかしがるそぶりも上目遣いが重なり魅力的だ、じっと見つめるとこちらにも恥ずかしくなるほど。

暫く付き合い始めた中学生のようにお互い固まっていたがふとローウエンが尋ねた。

「そういえば二日間、何かなされたいことありますか？」

そうだった。今日を含めて二日間、休暇なんだった。さて、見てお

くべきものはなんだ。

「ん……」

パツと思いつかない、見たいものや知らなければならぬものが多い。過ぎて逆に出てこない。法律や金銭、マナーなどは最低限覚えれば良い。あとこうして話している言語は通じているので同じなのは分かったが文字の方はわからないので、そこも調べたい……。そういえば勇者の剣の鞘に書かれた文字。あれが日本語だったのを思い出す。となると……。いや今は今後の予定を考えてるんだ。やはり考え出すとキリがない、とりあえず、どうしようか……。中々答えの出ない僕に、ローウエンは一つ提案をした。

「英雄の広場の方に、行きませんか？」

「英雄の、広場？」

「はい、帝都カラルコム最大の広場です。様々なお店が広場の噴水までの道を挟むように存在していて、食料から雑貨品まで幅広く売っています。大半の民衆はここに物を買いに来ています。」

広場か、店が並んでいるのなら通貨や文化の一部、文字や街の雰囲気や一度に体験できる。そしてなにより楽しそうだ。

「そこ良さそうだね。決めたよ、今日はその広場に行こう。」

「わかりました。では案内致します。」

「よろしく頼むよ」

ローウエンは一礼すると階段を降り始めたので、僕も続く。英雄の広場、一体どんな場所なんだろうか。初めてこの世界に来た時と同じような一抹の不安と期待を胸に抱いて、階段を降りていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0392dt/>

勇者行く

2017年4月1日16時56分発行